Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2025-10-05

身体の測定とその表象ー19世紀末フランスにおける科学と映像技術ー

増田，展大

(Degree)
博士（文学）
(Date of Degree)
2013-11-27
(Resource Type)
doctoral thesis
(Report Number)
乙第3235号
(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/D2003235

※ 当コンテンツは神戸大学の学術成果です。無断複製・不正使用等を禁じます。著作権法で認められている範囲内で、適切にご利用ください。

論 文 内 容 の 要 旨

論文題目　　（外国語の場合は、その和訳を併記すること。）

身体の測定とその表象
——19 世紀末フランスにおける科学と映像技術——

氏　　名

増田　展大

（注）４，０００字程度（日本語による）。必ずページを付けること。

本論の目的は、19 世紀末から 20 世紀初頭のフランスにおける四人の科学者たちに着目し、彼らの実践と映像技術との関係において、いかにして身体が測定され、表象されたのかを明らかにすることである。四章構成をとる本論においてはそれぞれ一人の科学者の実践がとりあげられる。それと同時に、各章を横断するかたちで解剖学と医学、生理学と心理学といった科学的諸領域が重なり合うことにもなる。これら近代諸科学に共通するのは、人々の身体を測定、数量化すること、さらにその結果を可視化、再現＝表象することに並々ならぬ労力を費やしたことにあった。なかでも、当時の科学者たちを熱狂させた瞬間／連続写真の登場に着目する本論は、およそ以下のような問題に貫かれている。すなわち、近代の科学的な知が編制されるプロセスにおいて、身体の測定とその表象に用いられた映像技術がどのような役割を果たしたのか。また、現代にまでいたる映像技術を論じるうえで、19 世紀末の科学的実践がどのような批判的意義を提示し得るのか。

そこで、本論が取り上げる世紀転換期の科学者たちとは、各章の順にエドモン・デボネ、アルベール・ロンド、アルフレッド・ビネ、ポール・リシェの４人である。各々の専門分野について言えば、デボネ教授は大衆科学である身体鍛錬術の創立者の一人であり、ロンドは臨床医学に応用すべき連続写真の意義を訴えた写真技師であった。さらに、黎明期の実験心理学を実践した心理学者ビネと、精神科医や美術史家、美術解剖学者として活躍したリシェが続くことになる。ところで、これまでの映像論において 19 世紀末は、写真の技術的転換期や映画前史として注目されてきた。そこで数多くの先行研究が費やされたのが連続写真を開発した生理学者エティエンヌ＝ジュール・マレーと、著名な医学図像集を刊行した神経科医ジャン＝マルタン・シャルコーによる視覚的実践である。この二人の大科学者と比して、その周縁に位置づけられる四人の名前は必ずしも、伝記的人物として知られるものではない。

しかしながら、本論を通じて明らかにするように、彼ら二人の大科学者がイメージに対してみせるリテラルかつパフォーマティヴな対極的な態度は、そのあいだに位置した映像技術の問題が近代諸科学における要点として機能していたことを明らかにする。言い換えるなら、「見ること」と「見せること」、さらに「知ること」が緊密に結びついていたこれらの科学的実践において、身体の測定とその表象には多様な映像技術の問題が否応なく介入していた。そこで本論が狙いとするのは、シャルコーとマレーを二つの軸としつつ、そこから螺旋上に旋回する近代諸科学の言説が諸々の映像技術とどのように絡み合い、相補的な関係にあったのかを示すことにある。その作業は、従来のように視覚装置を技術決定論的に言祝ぐことやイデオロギー的に告発することとも異なり、19 世紀以来の技術と知が相補的に編制される様子を明らかにすること、さらには、現在にまで続く映像メディアの新たな側面を照射することにつながるのである。

このように映像技術を主題とする本論にとっての先行研究には写真論や映画論、それらと大きく重なり合う視覚（文化）論が含まれる。なかでも、前世紀末に登場した後者の領域は、高級文化に限定されない近代以降の様々な文化事象を考察の対象とすることを可能にしてきた。そこでは多くの場合、写真や映画をはじめとする視聴覚イメージを通じて、いかにして身体が政治、社会、技術的な諸力との関係において歴史的に構築されたのかを明らかにすることが目指されてきたと言える。なかでも、「身体の測定とその表象」についての重要な先行研究となるのが、アラン・セクーラとジョナサン・クレーリーによる諸論考である。ヴァルター・ベンヤミンの複製技術論やミシェル・フーコーの考古学的方法論に着想を得た二人の議論はそれぞれ、人間の身体と

視覚について、それらが特定のメディア技術と接続されることによって内面から乖離した身体の表象として立ち現れると同時に、実証主義的な生理学や哲学における測定の対象になったことを明らかにする。このようにして、多くの刺激的な論点を提示する一方、彼らの議論が近代社会の権力関係において身体が規律訓練されるようになったことを強調するあまりに、その後の視覚文化論においても、なかば紋切り型の結論を再生産することへとつながる。

これらの先行研究に対して、本論にとっての特権的な対象となるのが、当時の医学によってヒステリーという名称を与えられた病理学的な身体のあり方である。ジョルジョ・アガンベンが指摘したように、内面や意味作用を欠いたそれらが前景化する「身振り」という観点に着目すると同時に、その条件となった映像技術の自動的な機械としての特性に焦点が当てられることになる。本論は、近代以降の機械論的な認識様態において人間の誤謬や技術の不具合として捨象されかねないところに敢えて留まり、そこで潜在的に機能した認識論的な可能性を技術的認識論として探求する。このような作業は、視覚技術によって身体が疎外されるという人間と技術の一方向的な関係とは異なり、諸々の映像技術のあいだに人間がいかにして差し挟まれるのか、さらにはそこに認められる不確実性が認識論的な可能性として作用することを具体的に明らかにするだろう。このような目的意識のもと、本論は具体的に以下のような手続きをとる。

まず第一章は、世紀転換期の優性学的認識に従順な身体を用意したと指摘されるエドモン・デボネの身体鍛錬術と彼らの具体的なポーズを映像文化論的な視野から再考する。ボディビルダーの祖先ともされる身体鍛錬の実践は、瞬間写真や印刷技術の発展といった技術的転換期にあって、写真技術を身体の分析や展示、競争化のために積極的に応用していた。彼らはさらに、写真のなかで彫刻像に変装するなどの演出によって、身体を見せることに極めて意識的な実践を展開する。そこで、みずからの身体を嬉々として写真映像に譲り渡す彼らのポーズを、初期映画における喜劇俳優や舞台俳優の演出、さらには両者の着想源として指摘されるヒステリーの身体表象と比較分析することによって、一見対極的に見える彼らの身体がそのスペクタクル化という実践において共通していたこと、さらに彼らが共有する表層的なポーズにこそ「身振り」としての可能性が認められることが明らかになるのである。

これら身体のスペクタクル化を規律訓練される身体とは対照的な側面としてとりあげるだけでは、両者が表裏一体の関係にあることの指摘に留まりかねない。そこで第二章では、瞬間／連続写真がその蝶番として機能したことを明らかにするため、身体鍛錬者やヒステリー患者を被写体とする写真技師アルベール・ロンドの実践に着目する。従来、映画技術の実現のための技術的条件として注目される瞬間写真は、それまでに裸眼で見ることのできなかった運動を顕示することによって、人間の「新たな視覚の閾」を明らかにした。なかでも、ロンドの技術開発は、その可視性を果たす可視化の作用が自動機械としての連続写真機内部に求められたこと、そこに生理学や臨床医学において構築された視覚性が委ねられていたことを明らかにする。このような事実は、写真に言及することの少ないクレーリーが 19 世紀初頭の視覚に指摘した「技術と身体化と社会的要請との相互構成的な関係性」を具体的かつ批判的に展開することを可能にするのである。

さて、これら自動的かつ機械的な可視化の作用についての考察を展開するため、第三章は一旦、写真技術から離れ、それに先立つかたちで利用されていたグラフ機器を考察する。現代の医療機器にまで引き継がれるように、被験者と限りなく近接的な関係を取り結ぶこの技術は、映画技術

にも先立ち、時間軸に沿って運動そのものを記録する機能において昨今の映画論から注目されてもいる。実際、19 世紀を通じて熱力学や音響工学、生理学や心理学といった科学的諸領域を横断したこの技術をフランスに精力的に紹介したのが、連続写真に取り組む以前のマレーであった。そこで彼の影響を受けてグラフ機器を応用した心理学者アルフレッド・ビネの実践を考察することは、この技術が生理学的な実験手法に基づく自然科学としての実験心理学の擁立と密接に絡み合っていたこと、さらにこの自動機械と身体との結びつきが科学者たちにとっての認識論的な萌芽として作用していたことを明らかにするのである。

これら自動機械としての特性が従来、再現＝表象のためのメディアとして理解される写真や映画にどのような影響を及ぼすことになるのか。この問題を考察する格好の具体例となるのが、最終章で取り上げられる美術解剖学者ポール・リシェの実践である。シャルコーのもとで挿絵画家として活躍した彼は、ロンドとともに写真によってヒステリー患者の身体を数多く記録すると、最終的にエコール・デ・ボザールの解剖学者として、その知見を彫刻作品へと結実させることにもなる。このように平面と立体を往還する彼が駆使したデッサン、写真、型どりという複製技術とその細部を形象的なものとして考察することによって、それらの不確実性がこの解剖学者の無意識的な欲望を駆動するように作用していたことが明らかとなる。さらに、このような議論は、20 世紀末にデジタル技術の登場に対して展開されたニューメディア論の言説との平行性をみせるものであり、そこで重視される「再現＝表象」や「シミュレーション」といった諸概念を批判的に再考する作業にもつながるのである。

以上のようにして、身体の測定とその表象の問題を論じる本論の手続きは、19 世紀末の科学認識論を技術論として展開することのみならず、現在の映像文化を批判的に論じる作業へと差し向けられてもいる。その着想の多くを昨今の映画論から得ている一方で、本論が取り上げる科学者たちの実践に映画技術はほとんど登場せず、その意味において彼らの実践は「失敗」とみなされるかもしれない。少なくとも、映画技術が提示する運動と瞬間／連続写真によるそれとが根本的に異なることは明らかである。しかしながら、彼ら四人の科学者に共通するのは、視覚技術を人間の認識モデルとして採用するのではなく、それら技術的実践との緊張関係においてみずからの科学的知識を不断に練り直していく態度にある。そのことは、写真と映画という近代を体現する映像技術の狭間にある瞬間／連続写真に固有のイメージの運動や作用が立ち現れていたことを明らかにする。そして最終的に、伝統的なカテゴリーが瓦解しつつある現代の映像技術一般へと視野を拡げるなら、以上のような手続きを経てこそ、従来の写真論や映画論、さらには現代の映像文化一般を批判的に再考することが可能になるのである。

論文審査等の結果の要旨

論文提出者氏名	増田　展大
論　文　題　目	身体の測定とその表象――19 世紀末フランスにおける科学と映像技術――

1　審査委員

区　分	職　名	氏　　名	
主　査	教授	長野　順子	印
副　査	准教授	前川　修	印
副　査	教授	嘉指　信雄	印
副　査	教授	松田　浩則	印
副　査	教授	長谷　正人	印

2　論文審査の結果の要旨・・・・・別紙１のとおり

3　試験の結果の要旨・・・・・・・別紙２のとおり

4　学位授与の可否

上記の論文審査及び試験の結果，並びに学力の確認の結果，論文提出者は博士（　文学　　）の学位を得る資格があることを認める。

神戸大学大学院人文学研究科

（ 別紙１ ）

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

氏　　名	増田　展大
論　文　題　目	身体の測定とその表象――19 世紀末フランスにおける科学と映像技術――

要　　旨

本論文は、19 世紀末から 20 世紀初頭にいたるまでのフランスの諸科学において、映画以前の各映像技術と身体とが取り結んだ複合的で力動に満ちた諸関係を探求した論考である。このような探求のために本論文は、四人の科学者および技術者の理論的営為と映像実践を素材にし、身体の表象とその測定を再検討する――その四人とは、身体鍛錬運動の実践者エドモン・デボネ、写真技術者アルベール・ロンド、実験心理学者アルフレッド・ビネ、美術解剖学者ポール・リシェである。彼らはそれぞれ、大衆科学、生理学、心理学、医学、美術解剖学などの複数の分野にまたがって活動していた理論家あるいは実践家であり、なおかつ当時開発された（瞬間）写真や写真にむすびつく映像技術を利用し、19 世紀末に前景化されていた、ひとびとのある種病的でぎこちない身体の身振りの「表象」を捉え、そうすることで、自らの科学的言説を、「見ること」と「知ること」のゆらぎの中で再組織化していたのである。本論の大きなテーマはこのようなものである。

序章では、視覚文化研究における身体とその表象をめぐる先行研究が参照され、その問題点が整理されている。たとえば、ジョナサン・クレーリーの先駆的研究は、感覚器官の規律訓練という観点から 19 世紀の身体と機械装置の結びつきを明らかにしたが、いくつかの問題を残していた。すでに頻繁に指摘されるように、いわゆる装置論という議論構成にともなう閉塞性ということ以外にも、彼の議論は、視覚と視覚表象を明瞭に区分して後者を不問に付す点、そして装置に結び付けられた人間の視覚が「誤謬」や「欠点」という否定的な観点からしか浮かび上がってこない点などが問題として挙げられる。むしろ本論は、技術装置と人間との実践における結びつき、その際に生じた「不確実性」を、必ずしも否定的な観点ではなく、ある種の認識の力の萌芽を指し示すものとして取り出そうとする。その軸となるのがアガンベンの「身振り」という考えであり、フランソワ・アルベラらの提起する技術認識論とそれに基づいて拡張された装置概念であり、さらには「変調する鋳型」という増田独自の概念（ジル・ドゥルーズ、アガンベン、パシ・ヴァリアホの三者が提起した二項対立概念の中間に位置する概念）である。

第一章では、デボネ教授の身体鍛錬術とその実践が主題になる。写真撮影を含めた彼の実践は従来、優生学的認識の具体化であるとして、イデオロギー批判的に論じられてきた。しかし本論は、彼の実践を、それが接続していた諸領域と共有するふたつの側面から議論を進めていく。一方が、科学的文脈と商業的文脈における「身体のカタログ化」という事態（美術生理学におけるリシェの実践、商業的彫刻写真に関する美術史学者たちの言説）であり、もう一方が、「スペクタクル化」、つまり、初期映画の「被写体」となることも多かった身体鍛錬者、舞台俳優、パントマイム役者、そしてその背後で参照点にあるヒステリー患者たちの身体の「スペクタクル化」という事態であった。カタログ化されるとともにスペクタクル化され、当時一般に浸透していた彼らの身振りとは、内面や言葉との結びつきから引きはがされた過剰な表層であり、それは映像技術に直面したひとびとの身体に要請された過剰な「身体技法」（ギユー）であったことが明らかにされる。

第二章では、シャルコーの臨床医学の画像診断に深くかかわった写真技師ロンドの実践が主題になる。ここでは撮影者と観者がいかなる技術的布置に引き込まれていたかが焦点になる。ロンドを含め当時のアマチュア

主査記載氏名・印	長野　順子

写真家を突き動かしていたのは、一方で「見ることと／知ること」への強迫であり、それが技術者や科学者たちの共有した科学的真実を追求する姿勢であった。しかし他方で、彼らは、当時の美的規範から、それどころか科学的客観性からも逸脱する表象を生み出しかねない、窃視的で遊戯的なアマチュア的姿勢も共有していた。一般にロンドは、シャルコーの臨床診断を補うべく画像診断を開発した技師として知られているが、実は彼の撮影した写真は、一見すると科学的客観性を損ないかねないような再編集を施したものが多いのである。あるいは同様の科学的真実を目指したとされるマレーの写真と彼の写真を比較しても、彼の実践は、グリッドやフレームを固持し、偏執的なまでに撮影装置の時間の可変性にこだわっている。こうした科学とも芸術ともつかない実践の背後にあったのは、一方でヒステリー患者の身体のもつ、ぎこちなくも循環的反復を続けるリズムを捕捉しようとする強迫であり、他方で、その根底にあった、写真やグラフ機器という自動機械がもたらした、「可視性」をこえる「可視化」の次元（ジョエル・スナイダー）、さらにはそれを自らに身体化しつつあった観察者の機械との混交的関係性だったのではないか。ロンドの失敗や欠陥とみなされた試行錯誤がこのように、身振りのリズムと可視化という、映像の根底に潜んでいた要因から詳細に明らかにされる。そして可視化や自動性という特性を帯びたグラフ装置が科学実践のなかでどのような位置価値を帯びていたかという問題が、次章に引き継がれることになる。

第三章では、連続写真に先行するグラフ機器が、いかにして人間の心理を可視化しようとする黎明期のフランス実験心理学において機能していたかが、心理学者ビネを中心にして探究される。ここで参照点となるのは、フランス精神医学の系譜であり、あるいはフランス実験心理学に先行するドイツ生理学でのグラフ機器を用いたさまざまな刺激反応実験である。この二つの流れがビネによるフランス実験心理学へと流れ込み、さまざまな登記法を行う彼の方法論の展開に結びついていたのである。しかし、このふたつの文脈の合流地点において起きていたのは、身体と機械の結びつきに由来した不確実性という問題であり、さらにはその不確実性を包含しつつ身体と機械を同型的なものとして捉える認識モデルの生成という事態だったのである。従来の映像論では、グラフ法およびグラフ装置は生理学者マレーの出発点と回帰点として議論され、彼の執拗な表象実践のなかに限定される仕方で議論されていた。本章は、グラフがもつ領域横断的な次元をあぶりだした考察を呈示している。

第四章では、こうした自動機械の可視化という次元が、従来の写真や映画という再現表象メディアにどのような影響を及ぼしたのかが考察される。その中心となるのはリシェ、つまり、シャルコーのもとで挿絵画家としても活動し、ロンドと同様に正常／異常な身体運動を数多くの写真に記録し、最終的にはエコール・デ・ボザールの美術解剖学者として自らの知見を彫刻作品へ結実させた人物である。リシェの使用したデッサン、写真、型どりという複数の複製技術の働き、それぞれがもたらす細部性、そして複製技術が身体との関係において生み出していた不確実性、それらの要因が従来の再現表象的なイメージの指示参照性をいかに掘り崩していたのかが、「形象的なもの」という観点から明らかにされる。

結語では、このようにして四人の技術者と科学者による実践が、従来のように、単線的な映像史観、あるいは伝記的な発明史として語られるのでもなく、なおかつ個別の領域や個人や国境によって分割されるのでもなく、むしろ彼らが共有していた技術的布置と、そこでの人間の身体の表層的身振りと技術の厚みとの絡み合い、不確実性ゆえの認識モデルの生成という観点から統合的に捉えなおされる。同時にまた、「自動性」や「可視性」という特性を帯びたグラフという、それ以後の映像の根底にある特性が、その認識モデルの形成においていかに萌芽的な契機をなしていたのかが明確に議論され、さらには 19 世紀末をめぐる本論の内容が、もうひとつの世紀末におけるニュー・メディアの議論にいかに接続可能であるかが議論される。

以上のように、本論は、写真や映画をふくむ映像論、とくに映画前史として個別に議論されがちな諸分野における映像実践を、膨大な資料の蓄積のみならず、最新の映像研究の知見も十分に咀嚼しながら、技術的認識論という枠組みのなかであらたな布置に果敢に置きなおそうとした力作であり、従来の文化研究的な映像論のスタンスとも一線を画する新たな研究の方向性を練り上げようとする試みであることが、きわめて高く評価される。もちろん、資料の問題もあり、論証や分析の多少不十分な箇所はあるし、何よりも多分野にわたる資料と言説を結びつけるための主要な諸概念についてはいっそうの精錬が必要であるかもしれない。しかし、映像論や視覚文化論が現在においてその可能性として依拠すべき枠組みを複数提示している点は、十分に評価できることは確かである。

本審査委員会は、以上の点から、全員一致で、論文提出者増田展大が博士（文学）の学位を授与されるに足る資格を有するものと判定した。